

毎年精力的に  
個展を開催

なもの」と自ら言う。そ  
の言葉通り道教大釧路校  
助教授としての仕事場・  
教室は鍛冶屋風景そのま  
まだ。アトリエとか工房  
という表現はまだやさし  
く、加藤さんが作業衣に  
ゴム長をはき、全身を汗  
みづくにして制作に打ち

込む所は工場の名がふさ  
まれた作品を加藤さんは  
「これで良いのかとい  
うかたち」シリーズは、  
意志をひそめたような自  
然の風に心を寄り添わせ  
て、大胆な創造の結晶を  
見せた作品群。金属とい  
うその本質を忘れさせる  
柔らかさと温かさは、美  
を憧憬する作家の人間味  
を伝えてくれそう。

## 加藤直樹さん(四九) (釧路市貝塚二の二)

道教育大釧路校助教授

# 釧新郷土芸術賞に輝く横受賞者の顔

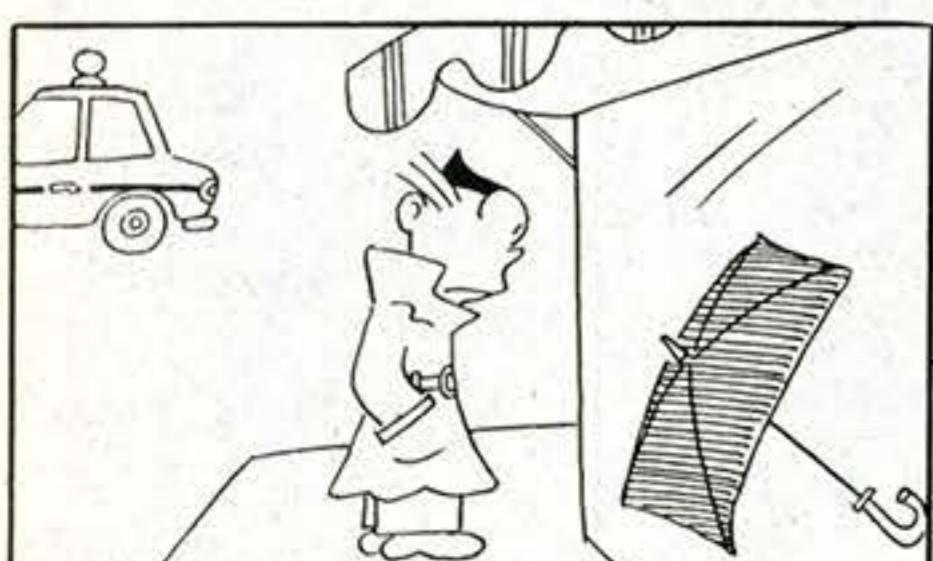
□下□

## 鎌金の作品で新風

### 金属忘れさせる柔らかさ

ア・ペイ君

木崎征夫



### 演劇活動にも打ち込む

加藤さんはかつて本紙に寄せた一文に「私はひそかに、このお月様である円、石である四角、森

いで、劇団にも半分与えられたようならうれしさです」と加藤さんは言う。絵画中心の釧路美術界に加藤さんの現代美術作品は、今後も新風を送り続けていきそうだ。

つも恥ずかしい思いが消えない」と見つめる。昭和五十一年の全道展初出品の立体作品で、いきなり札幌市長賞を受け

時計台ギャラリーでも個展を、さらに来年九月に開催する。加藤さんが制作する鎌金作品の一つ「風の加藤さんは市内の劇団北芸（第一回釧新郷土芸術賞受賞）代表として、演劇活動にも長年打ち込んできた。「この受賞は私個人として面映ゆいほど。演劇に支えられて美術作品も生まれてくる思

た後は公募展への出品をやめ、後進への指導に専念しつつ平成三年から釧路市内のミヤタ画廊で個展を開き、昨年秋は札幌